

研究の目的と方法：

1980年代の構造調整政策により、アジア途上国の中でグローバル化を通じて経済成長を達成しようとする傾向が広まり、市民社会においては多くの問題が生じている。その経済格差や不平等の象徴のひとつとしてストリートチルドレン問題があらわれている。この問題は、各国でさまざまな政策がとられているにもかかわらず、把握が難しく、解消にはいたっていない。

ストリートチルドレンは、都市部に住み、観光客とも接し、もっとも目につく立場にありながら、無視され、排除されることが多い。路上での生活は、搾取の被害、学校教育、不衛生な住環境、虐待、薬物、失業、長期にわたる身体的・精神的苦痛など、あらゆる状況において子どもの未来を奪う危険性を増大させる。

子どもが健全に社会の中で育っていくためには、愛され、守られる必要がある。お金に多少余裕があっても、家庭内に虐待や暴力などがあり愛情に飢えている場合には、子どもが路上に飛び出す可能性がある。一方で、家族との関係が良好であっても、経済的理由や社会保障の欠如により、路上で暮らすほかない場合もある。路上にいるという側面だけは共通していても、その背景は多岐にわたるといえる。

筆者は、社会人になってから、NGO プラン・ジャパンの翻訳ボランティアをしていた。そこで得た途上国の子どもたちのイメージは、素直、前向き、笑顔である。そんなとき、カンボジアのシェムリアップを訪れ、そこで土産物売るストリートチルドレンたちに出会った。私からお金をひたたくようにもっていき、なんで自分からは買わなかったのだと他の子どもたちからたたかれ、叫ばれた。それまでのイメージとの落差に、あの手紙の世界はどこにあるのかとショックを受けた。何度もそのシーンを思い起こしながらも、子どもが一目散にかけていった「お母さん」の存在が頭から離れなかった。なぜ現代のように先進国から解決のための援助が入り、団体も多数あるのに、目の前のような光景がなくなるのか。支援が届かない理由は何か。「お母さん」は力になれないか。

そのようなことを考えていくうちに、ストリートチルドレン問題を解決するうえで、その母親の意識を変えることが重要ではないかと思うようになった。路上で活動、生活している子どもの母親の状況を把握し、母親の問題を解決することが、ストリートチルドレンの減少、将来のストリートチルドレンを生まないことにつながる一策となるのではないか。なぜなら母親が夫と離れて一人で子育てをしている状況になったとしても、生活力があれば子どもは働かずにすむ。また地域社会とのつながりを持ち、保護プログラム等の情報を持っていれば生活の安定や子どもの保護をすることができると思うからである。

本論では、ストリートチルドレン問題を、母親の置かれた状況に注目し、子どもの家庭

環境などから分析し、フィリピンのマニラで実施したフィールド調査をもとに、支援策の効果、また課題について考察する。

研究の目的は、フィリピンのストリートチルドレンが生まれる背景のひとつとして、かれらの母親の生活状況に注目し、その実態と政策とのギャップを明らかにすることである。これをふまえ、ストリートチルドレン問題に対する包括的な支援政策を検討したい。

その方法は、文献研究とフィールド調査が中心である。前者としてはユニセフや国際労働機関（ILO）のデータ、また関連国際機関から出ている報告書、論文、出版物、NGO 発行の報告書などを参考にしている。フィールド調査は 2008 年 11 月と 2009 年 11 月の 2 度にわたって実施した。2008 年日本福祉大学大学院のフィリピンスクーリングでの訪問で得た情報も含まれている。

論文の構成：

第1章 序論

第1節 研究の背景

第2節 研究の目的

第3節 研究の方法

第4節 論文の構成

第2章 グローバルなストリートチルドレン問題

第1節 ストリートチルドレンについての概要

第2節 ストリートチルドレンが生まれる背景

第3節 ストリートチルドレンに対する国際的な取り組みと現状

第4節 まとめと考察

第3章 フィリピンのストリートチルドレンと母親の現状

第1節 ストリートチルドレンと家族の関係

第2節 ストリートチルドレンの母親の生活状況

第4章 ストリートチルドレンと母親への支援政策

第1節 支援政策の枠組み

第2節 社会福祉省や地方自治体の取り組み

第3節 教育支援について

第4節 NGOによる取り組み

第5節 まとめと考察

第5章 ストリートチルドレンと母親への支援政策の課題

第1節 家庭状況からみたストリートチルドレン

第2節 ストリートチルドレンの母親に対する支援政策の問題点

第6章 今後の政策に向けて

第1節 まとめ

第2節 政策的合意の考察

第3節 研究上の課題

論文の概要：

序論に続く第 2 章では、概要、背景、国際的な取り組みと現状について述べている。本論で使用するストリートチルドレンの定義は、フィリピン国内で一般に使用されている定義である。それは 4 つに分類され、**Children on the street** 「路上で働いているが家族と定期的につながりがある子どもたち」が約 70%、**Children of the street** 「路上が自分たちの家であるとみなし他のストリートチルドレンを家族であるとみなす子どもたちで、家族のもとへは不定期に訪れる」が約 20% となっており、家族と何らかのつながりがある子どもが大半を占めることがわかる。ほかに **Abandoned and neglected children**、**Children of street families** に分類される。

ストリートチルドレンが生まれる背景には、大きく分けて社会背景と家庭背景がある。フィリピンの社会背景は、80 年代には経済成長が停滞し貧富の差が拡大した。農地改革が進まなかったことから、90 年代には都市化進み、マニラ首都圏に多くの不法居住者やスラム住民を抱えることとなった。この頃ストリートチルドレン現象が顕著になったといわれている。

家庭要因は、家計が貧しいという状況に加え、貧困によって引き起こされる家庭内暴力や家庭崩壊といった問題がある。両親や兄弟の低い教育達成度、両親の移住経験などの背景も考えられる。フィリピン特有の事例としては、海外出稼ぎ契約労働者という雇用形態があり、両親の海外での出稼ぎ増加がストリートチルドレン発生の原因になっているとの見方もある。貧困とそれによる離婚、再婚、失業、暴力、中毒、虐待などが家庭にもたらす影響は大きく、とくに父親がなんらかの理由により去ったあとの、母親の負担が大きい。母親は仕事、育児、家事に追われ、仕事を始めると子どもが育児のために学校を休むこともある。

次に国際的な取り組みとしては、国際労働機関、国連子どもの権利条約、国連事務総長報告「子どもに対する暴力」を取り上げている。ILO による児童労働禁止及び撤廃のための行動は、教育を重視しながら児童労働をなくす方針となっている。また子どもの権利条約は、住居や健康、家庭環境を含めた生活全般にかかわる事項や、子どもが主体となって参加し行動することを促進するなどが権利として盛り込まれた画期的な条約であり、現在のストリートチルドレン支援政策に深く影響している。

第 3 章では、フィリピンで行った現地調査の事例を紹介している。一つ目は、マニラにある NGO が運営するストリートチルドレン保護施設での子どもの家庭環境調査である。二つ目は、保護施設に滞在する子どもの母親を訪ねた生活状況の調査である。まず一つ目の子どもの家庭環境調査からは、貧困や家庭内暴力、父親の失業などの背景が見え、かつ母子家庭が目立っていた。二つ目の母親の生活状況調査では、マニラ市北部墓地に住む母親と、マニラ市内の公園に住む母親にインタビューをした。二人のうち一人は仕事があるが、どちらにも両親や親せきはおらず、夫とは別離している。NGO による両親学級には、交通費の問題で片方の母親しか参加していなかった。

第4章では、ストリートチルドレンと母親への支援政策を述べている。フィリピンにおけるストリートチルドレン政策の枠組みは、フィリピン子どものためのアクションプラン、子どものための国家的実行計画などを参考にした。これらは国連子どもの権利条約や、ミレニアム開発目標などのグローバルな取り組みに基づいている。フィリピンの特徴として、ストリートチルドレンナショナルネットワークの存在がある。コミュニティベースの予防活動、施設ベースのサービス、路上ベースの介入活動の3つの対策を挙げている。NGOによる支援は、両親向けの生計プログラムの実施や、路上に出向いて子どもに教育を施すストリートエデュケーションがある。これは、ストリートチルドレン自身が将来教師やソーシャルワーカーとなるきっかけを作っており、雇用の創出にもなっている。

第5章では、第3章の事例と第4章の支援政策や活動事例をもとに、それらを比較分析し、ストリートチルドレンと母親への支援政策の課題について考察を行う。第3章の母親の生活状況からわかる特徴は、公園や墓地といった孤立した地域に住んでいること、頼りになる血縁者が近くにいないこと、そして母子家庭であることの3つである。ストリートチルドレンの母親に対する支援政策の問題点としては、4つをあげている。一つ目は、母親に焦点を置くアプローチが欠如していることである。この理由には、母親の居場所へアクセスしにくいこと、実践されるプログラムの中に、母親への対策が独立の項目として明確に認知されていないこと、母親へ支援が行き届くように細分化・専門化した支援の実現を困難にしているNGOの財政不足、などがある。二つ目の問題点は、母親への生計支援の不足である。公園や墓地に住む母親にとっては、その地域に出入りしているNGO所属のソーシャルワーカーが情報元であり、政府や自治体が提供するサービスとは無関係であることが多い。最後の三つ目の問題点は、医療と住居の不足である。墓地内には医療サービスがなく、公園にはNGOによる巡回サービスのみであった。仕事がないことや医療不足で、安定した収入を得ることが難しく、そのため公園や墓地から離れることができない。

第6章では、今後の政策に向けて、政策的合意の考察と研究上の課題を述べている。考察は、3つをあげている。母親の意識変化を促す教育と交流の場の促進、家庭環境の実態把握と訪問支援、そして子どもの保護とカウンセリングの継続である。ストリートチルドレン保護政策における母親へのアプローチは、家族アプローチという大きな枠組みの中に位置づけられ、母親への独自の個別サービスは容易ではないことがわかった。また同時に、墓地内や公園内に仲間を作り、つながりが強いこと、両親学級のような情報共有のできる場が貴重であることもわかった。

母親は、生活改善プログラムに積極的に参加する姿勢や、両親が集まる共有ミーティングに参加したいという自主的な姿勢もあることから、母親を勇気づけると前向きな効果が期待できると考え、母親の意識変化を促す教育と交流の場の促進が重要であると考えた。これが一つ目の考察である。二つ目は、家庭環境の実態把握と訪問支援の実施である。母親の所在と状態を把握するために、こちらからストリートチルドレンやその母親が住んでいる地域へ出向くことが必要だと考える。ストリートエデュケーションを行う際に、ソー

シャルワーカーが同行して子どもとカウンセリングを実施することから、この場を利用してデータ蓄積を重ねること、このような訪問を継続することが重要である。そして三つ目の考察は、子どもの保護とカウンセリングの継続である。保護施設は一時的であり、時期が来れば進路を相談の上、親元に戻ることとなる。その場合に、親の仕事や家庭環境が変わらなければ進歩がない。子どもが施設に滞在している時間を利用して家族のカウンセリングを続け、同時進行で支援をしていくことが重要である。このためには人員や予算が必要なため、公的機関からの財政サポート、とくに家族支援という具体的な費目まで定められていることが望ましい。具体的な母親への支援内容は、居場所を確認し訪問を続けることで、希望に応じて住宅支援、就職支援、診療など可能な方法を探すことである。それらの選択肢を考慮しながら、母親やその仲間たちの意識を変化させ、子どもとの関係、自分たちの将来について違った視点から考え、自分の生活をよりよいものに変えていけるものと思われる。

研究上の課題は、父子家庭の状況や団体同士の支援に対する協力体制などについては今回十分に調べることができなかった。筆者の時間的・資金的制約により、調査した団体と事例の数が少なすぎたと反省している。